



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	研究機関の一般公開に適した形式のサイエンスカフェ : 花き研サイエンスカフェ開催報告
Author(s)	四方, 雅仁; Shikata, Masahito
Citation	科学技術コミュニケーション, 8, 56-64
Issue Date	2010-12
DOI	<a href="https://doi.org/10.14943/47091">https://doi.org/10.14943/47091</a>
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/44526">https://hdl.handle.net/2115/44526</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	JJSC8_005.pdf



報告

# 研究機関の一般公開に適した形式のサイエンスカフェ

～花き研サイエンスカフェ開催報告～

四方雅仁

Science Café Suited to Open House of Research Institutes:  
A Report on Science Café at the National Institute of Floricultural Science

SHIKATA Masahito

Keywords: science café, open house, casual, interactive communication

## 1. はじめに

2005年頃から日本で広まったサイエンスカフェは、気軽な雰囲気の中で科学について研究者と一般市民が語り合うというものである。よく「双方向コミュニケーション」というキーワードが用いられるが、研究者が一方的に話す講演会のような形式のサイエンスカフェも多いのが現状であろう。また、「気軽」という点においても、サイエンスにあまり関心がない人にとってはサイエンスカフェに参加すること自体が敷居が高い。そのような人も巻き込めるようなサイエンスカフェを開催してこそ、意義深いものになると考えられる。

サイエンスカフェは単独のイベントとして開催されることが多いが、サイエンスアゴラのような科学イベントや研究機関の一般公開の中の企画の一部として開催されることもしばしばある。筆者は、茨城県つくば市にある農業・食品産業技術総合研究機構の花き研究所の一般公開でサイエンスカフェを開催した。「気軽な雰囲気」「双方向コミュニケーション」をとることに重点を置き、一般公開というイベントの性質を利用した、一般公開に適していると考えられる形式のサイエンスカフェを試みた。本稿では、その開催に至るまでの経緯と結果を報告する。

## 2. 背景

### 2.1 一般公開について

全国各地の科学研究機関では、研究所の一部を開放して一般の人に研究内容を展示する一般公開が行われている。研究機関にとっては住民に研究成果を知ってもらい、科学技術を広めることができる。一方訪れる人にとっては、そこで何を研究しているのかを知ることで科学への関心を高めることができるだけでなく、地域住民の安心感にもつながると考えられる。施設見学やパネル展示だけでなく、実験教室のような体験型のイベント、子ども向けの企画、試食やプレゼントなど、一般の人が科学に触れる機会が設けられており、各機関の特色を活かした一般公開が行われている。

---

2010年5月11日受付 2010年9月6日受理

所 属：農業・食品産業技術総合研究機構花き研究所，北海道大学CoSTEP2010年度受講生  
連絡先：mshikata@affrc.go.jp

## 2.2 筑波研究学園都市での一般公開

茨城県つくば市の筑波研究学園都市は「科学の街つくば」として振興が進められており、独立行政法人や民間企業の研究所などが100以上集まっている。2010年4月にスペースシャトルで宇宙に飛び立ちミッションを行った山崎直子さんや、宇宙ステーションで長期滞在した野口聡一さんなど、日本人宇宙飛行士が所属している宇宙航空研究開発機構もそのひとつである。また、2008年にノーベル物理学賞を受賞した小林誠さんが研究を行っていた高エネルギー加速器研究機構など、話題になっている科学ニュースを身近に感じることができるところも含まれる。

つくばの研究機関の多くは、毎年科学技術週間<sup>1)</sup>に合わせて一般公開を行っている。各研究所を回る無料巡回バスも走り、見学者側にとっては複数の研究所を短期間で回ることのできる絶好の機会である。一方でそれぞれの施設での滞在時間は短くなるため、時間をかけて研究を紹介するには不向きであり、見せる側はなんらかの工夫をする必要がある。

## 2.3 花き研究所での一般公開

農林水産省管轄の独立行政法人の研究所が集中する、いわゆる筑波農林研究団地と呼ばれる地域でも、科学技術週間中の4月16日(金)と17日(土)の2日間、一般公開が行われた<sup>2)</sup>。公開されたのは、農業・食品産業技術総合研究機構に所属する中央農業総合研究センター、作物研究所、野菜茶業研究所、果樹研究所、花き研究所、畜産草地研究所、動物衛生研究所、農村工学研究所、食品総合研究所、農業者大学の10機関と、農業生物資源研究所、農業環境技術研究所、国際農林水産業研究センター、森林総合研究所、種苗管理センター、農林水産技術会議事務局筑波事務所の、あわせて16機関である。

花き研究所(以下、花き研)は同一敷地内にある果樹研究所との合同開催で、「くらしを彩る花と果物」というテーマで一般公開が行われた。花き研は、花の生育や開花の調整技術の開発、新しい花の創製、品質の保持など、花に関する様々な研究を行っている機関である。一般公開では最新の研究成果紹介や、「バラの特集」としてバラについてのいろいろな知識や話題をパネルや実物で展示した。会場にはたくさんのバラが飾られ、甘い香りが漂っていた。サントリーで開発され昨年販売が開始された「青いバラ<sup>3)</sup>」も展示された。他にも、園芸相談、ミニ講演会、フラワーアレンジメント体験などがあり、クイズラリーを完走するとアゲラタムという花の苗などがプレゼントされた。来場者は2日合わせて3,377人であった。その中で今回、花き研初の試みとなるサイエンスカフェを開催した。

## 2.4 つくばのサイエンスカフェ開催状況

つくば地域では、産業技術総合研究所や筑波大学が定期的にサイエンスカフェを開催しているのに加え、農業環境技術研究所、高エネルギー加速器研究機構などでサイエンスカフェの開催実績がある。一般公開でのサイエンスカフェは、2009年は動物衛生研究所で「獣医カフェ」が、2010年は花き研の他に畜産草地研究所で「畜草研サイエンスカフェ」が開催された。筑波研究学園都市は前述のように研究機関が数多く存在し、「東京の過密緩和」と「科学技術の振興と高等教育の充実」を目的に国家プロジェクトとして建設されたという背景や、1985年には科学万博が開催されたことから、つくば市民にとって科学は身近な存在であり、「サイエンスカフェ」も他の地域より親しみがあるのではないかと考えていた。しかしながら実際は後に述べるようにサイエンスカフェを知らない人も多く、サイエンスをもっと身近に感じてもらう努力が必要だと考えられる。

### 3. 花き研サイエンスカフェ開催まで

#### 3.1 企画と運営メンバー

以上のような背景の中、花き研一般公開でサイエンスカフェを開催することになった。花き研ではそれまで一般公開を含めてサイエンスカフェを開催した実績はなく、研究所として初めての企画であった。最初に企画を提案したのは、一般公開の3ヶ月前となる1月19日であった。一般公開運営委員から新企画募集の案内があり、以前からサイエンスカフェをやってみたいと思っていたことから提案した。背景、方法、必要なものなど簡単な内容を記載した企画書を提出した後、企画が採用された。

具体的な内容を詰めるため、まずは協力してくれる人を募集した。花き研のポスドクを中心に若手研究者（入所して3年程度までの主任研究員および任期付研究員）に声をかけたところ、最終的に私を含めて7人（うち4人がポスドク）が運営メンバーとしてサイエンスカフェを開催することになった。ポスドクを中心としたのは、私自身がポスドクであるということと、職員は来場者の案内や展示説明などの係が割り当てられており時間が制限されている一方で、ポスドクは特に役割はなく動きやすいためである。

#### 3.2 サイエンスカフェの形式

気軽な雰囲気では研究者と参加者の双方向コミュニケーションがとれるようなサイエンスカフェを目指して企画を練った。まずサイエンスカフェの全体の雰囲気を決定する形式について、運営メンバーで話し合った。研究者一人が研究内容を説明した後、質疑応答や参加者同士で自由に会話を行う「講演会型」のような案もあったが、一般公開では他にもミニ講演会も企画されていることから、差別化を図るためにも別の形式にすることにした。複数のテーブルに分かれて少人数で研究者と参加者が自由に会話する形式（以下「テーブルトーク型」とする）であれば双方向性もあることから、花き研サイエンスカフェは「テーブルトーク型」とすることにした。気軽な雰囲気を作り出すため、一般のサイエンスカフェのようなゲストと呼ばれる話題提供者を置くのではなく、運営メンバーの中の花き研若手研究者が来た人に合わせて話し相手をする、というざっくりばんな形式を目指した。若手研究者であることも参加者にとっては話しやすいのではないかと考えられる。自由に会話するといっても何を話せばいいのか難しいので、話のきっかけとなるようなネタを用意するようにした。例えば私は遺伝子組換えで新しい色や形の花を作り出すという研究を行っているので、その写真や資料を準備することで、それをきっかけに相手に合わせて自由に話すようにした。学会のポスター発表では研究内容が書かれたポスターの前で見に来てくれた人に説明して討論を行うが、その簡易版のようなものである。注意点として、ただ研究内容を説明するのではなく、あくまでも会話を楽しむように心がけることにした。

また、一般公開の中の企画ということ配慮し、単独開催のサイエンスカフェでは実行しにくいような、一般公開ならではのスタイルを考えた。一般公開におけるサイエンスカフェと単独開催のサイエンスカフェの一番の違いは、他のイベントの有無である。一般公開の来場者が展示を見て印象に残ったものや疑問に思ったことをすぐに議論できる場があれば、より深く学べる

表1 花き研サイエンスカフェの特徴

	花き研 サイエンスカフェ	一般的な サイエンスカフェ
人数 (研究者:参加者の比)	1:1~5	1:20以上
開催日時	平日昼間 5分だけでも	平日夜、土日など 1時間半~2時間
開始時間	開催時間中なら いつでも	決まっている
会場	オープンスペース	お店、会議室など <sup>4)</sup>
テーマ	特に設定せず	事前に告知

し記憶にも残りやすい。双方向コミュニケーションをとることができるサイエンスカフェはそのような場として非常に適していると考えられる。この特徴をうまく活かすための工夫をいくつか凝らした(表1)。

まず、一般的にはサイエンスカフェの開始時間より1時間半から2時間の間、参加者は会場にいる必要があるが、花き研サイエンスカフェでは時間を決めず出入り自由という形にした。一般公開では他の企画も数多く組まれていること、そしてつくばでは単独研究機関での一般公開ではなく他の研究機関でも一般公開を開催しているという性質上、1日で複数の研究機関を訪問する来場者が多く、ひとつの研究機関、ひとつのイベントに長時間参加者を拘束することはできない。そこで、いつどの時間に来てもらってもよく、そしていつ帰ってもらっても構わないという、一般公開に合ったスタイルにしたのである。「講演会型」では途中入退場はしにくいので、「テーブルトーク型」に適したスタイルとも言えるだろう。さらに気軽に寄って行きやすくするために、「5分だけでも」というキーワードを使用した(図1)。花き研一般公開は金曜と土曜の2日間、午前10時から午後4時まで開催されるが、サイエンスカフェは金曜日みの午後2時から4時までとした。この2時間の間なら出入り自由ということである。時間帯が平日の昼間という点も、夕方や土日で開催するサイエンスカフェとは異なり、一般公開ならではのスケジュールである。

会場はより気楽な気持ちで立ち寄れるような場所を選定した。建物の角にあたる廊下の曲がり角に3つの丸テーブルとイスがおかれた談話スペースがあり、そこを会場として使用することにした。他の展示会場からは少し離れており、一般公開時には袋小路となる場所なので誘導しないと気付かれないが、大きな窓があって開放感がある雰囲気や、休憩も兼ねて話ができるという利点があった。また、会議室のような部屋を使用した場合、中の雰囲気がわからず入りづらいという意識の壁があるが、通路の一角のオープンスペースであるという点でも気軽に立ち寄れる雰囲気を作るのではないかと考えた。会場が小さいので最大でも15人しか同時に席につけないが、出入り自由という形式にしたため、入れ替わり参加者が研究者と話をすることができる。

花き研サイエンスカフェのもうひとつの特徴は、話の具体的な中身を告知していない点である。一般的なサイエンスカフェでは、たとえば「新型インフルエンザ」や「原子力発電」のように詳細なテーマが示されているが、花き研サイエンスカフェでは「花き研の研究者と気軽に話そう!」というサブタイトルをつけただけであり(図1)、花き研なので花についての話だと予測はつくがそれ以上のことはわからない。こうすることにより、参加者はテーマにとらわれず話ができ、たった今見てきた他の企画や展示について話しやすくなる。話し相手となる研究者は参加者に合わせた臨機応変な対応が必要となる。



図1 案内ポスター

### 3.3 準備

花き研サイエンスカフェは、研究者と参加者が気楽な雰囲気ですべて自由で会話するという形式のため、一般のサイエンスカフェを開催するときに行うようなゲストとの打ち合わせや、プレゼンテーションのためのスライド作りなどの準備を特に必要としなかった。ただし、前述のように何もないと何を話せばいいのか研究者も参加者も困惑するので、話のきっかけとなるような写真などのネタは各

自用意してもらうようにした。フリートークだと専門分野以外の研究の話題になることも予測されるが、ネタを準備しておくことにより、自分の専門分野に会話の内容を誘導することができる。

花き研サイエンスカフェの宣伝については、一般公開の中の一企画なので、日時とタイトルは研究所の一般公開運営委員に知らせたが、その他の案内はほぼ運営委員におまかせすることができた。とはいうものの、より多くの人に来てほしいので、個人的にツイッター (twitter) で宣伝していた。また、案内のポスター (図1) を壁に貼り、当日来た人にアピールした。

会場には花のアレンジメントを飾ったりテーブルに置くことで花き研らしさを出すと同時に、参加者を心理的に和らげる効果も狙った (図2)。

難しかったのは参加者の想定人数であった。昨年の一般公開の金曜日の入場者数は1,847人であり、1時間あたり約300人の来場があった計算になる。そのうち何割の人がサイエンスカフェに寄ってくれるのかは全く想像がつかなかった。来場者の10人に1人が立ち寄ってくれると2時間で60人になる。会場の都合上、60人程度なら余裕を持って対応ができ、最大でも100人程度だと予測した。そのため、100人分の飲み物やプレゼントを準備した。参加者には花の種をプレゼントすることにしたが、プレゼント目当てに来て話をせずに帰る人もいることが予想されたため、これは事前告知はしなかった。



図2 会場に飾った花

## 4. 花き研サイエンスカフェ「花き研の研究者と気軽に話そう！」開催当日

### 4.1 会場の様子

サイエンスカフェ当日、運営メンバー7人のうち2人は案内係、5人が参加者の相手をして話す人とし、5人のうち2人は2時間常駐、3人は40分で交代とした。つまり必ず3人は話し相手として会場にいることになる。お客さんが会場に来られたらテーブルに案内し、飲み物をすすめ、研究者とフリートークをしてもらい、最後にアンケートに答えてもらってプレゼントを渡す、という流れである。

当日は4月にしては真冬のような寒さで客足が心配されたが、一般公開を楽しみにしていた人が多かったのか朝から続々と研究所を訪れていた。サイエンスカフェ会場は前述のように他の展示会場から少しはずれたところにあり、気付かずに素通りされる可能性もあったため、ポスターを貼り矢印で人の流れを誘導するように工夫した。その甲斐あってかサイエンスカフェ開始時刻の午後2時から終了の4時まで、特に呼び込みをしなくても客足が途切れることなく、最終的には約50人の参加者が訪れた。一般公開へは1,768人の来客があり昨年と同様であったので、予想通り10人に1人程度サイエンスカフェに足を向けたことになる。それでも会場のキャパシティが参加者に対して少し不足気味で、待ってもらう人、入れずに帰る人もいた。各テーブルで2~3人グループで来場した参加者と話すことが多かったので (図3)、複数のグループをまとめて4~5人集まってから話す、などの工夫をすればもう少し余裕をもって対応できたかもしれない。平均滞在時間は、「5分だけでも」と



図3 花き研サイエンスカフェの様子

いうキーワードを入れていたが、実際は10分～15分程度であったようだ。中には休憩しに来ただけ、という人もいたようだったが、それほど気軽にアクセスできるような雰囲気だったと考えられる。

#### 4.2 各テーブルでの話題

実際に各テーブルでどんな話題になったのかについて、話し相手となった研究者に後日簡単なインタビューを行って尋ねたところ、花の色、花が咲く仕組み、花の日持ち、遺伝子組換え、花の人に対する心理的な影響という、各自の専門分野の話をしたようであった。それぞれの研究テーマに関する写真や資料をプリントアウトしたものを事前に準備することで、話の内容を誘導することができていたようである。研究者側は自分の研究内容を紹介したり、一般公開の展示の感想を聞いて、展示内容を補足するような説明をしたりした。話し始めに「普段花を買いますか?」「家に花を飾ってますか?」という一般的な質問をすることにより、緊張感を和らげた研究者もいた。気軽な雰囲気を作るとともに、なるべくわかりやすく話すことをみんな心がけていたようである。少し専門的で難しい話でも、少人数だと難解な部分でも確認しながら話を進められるので話についていけなくなるということはなく、参加者は興味を持って聞き入っていた。参加者は花き研でどういう研究が行われているか、花の研究はどんなものかを知ることができたと思われる。研究者からの一方的な話になることはなく、参加者からの質問も多く出た。研究内容に対する質問に加え、花き研で作った花は売っているのかという消費者としての問いや、うまく育てるにはどうすればよいのかという自らの経験を元にした問いも出た。また、「畑にマリーゴールドを植えると虫除け(正確には線虫の防除)になる」など花に関する話が参加者から出ることもあった。それぞれの研究者が4組程度の参加者と話し、相手によって話しの流れも変わっていくため、研究者側も会話を楽しむことができたようである。会話はどのテーブルでも盛り上がったようで、気軽な和やかな雰囲気でも双方向コミュニケーションをとるといふ目的は達成することができた。

### 5. 花き研サイエンスカフェを終えて

#### 5.1 参加者のアンケート結果より

花き研サイエンスカフェの感想の調査および次回開催する際の参考にするため、参加者に簡単なアンケートを記入してもらった。参加者約50人に対して回答数は32で回収率は決して高くないが、これはアンケートを渡しそびれた人がいるのと、親子連れの子供からはアンケートを取っていないことが要因である。

32人の回答者の男女比は4:6で女性の方が多く、年代は60歳代以上の方が56%であった(図4)。職業は主婦が半数を占めており(図5)、「その他」の中には無職の方もいた。このような割合は、一般公開が平日の日中開催であり、参加できる人が限られているのがよく表れている。一般的に行われているサイエンスカフェは、夜であったり土日であったりと、平均的なサラリーマンを念頭に置いた時間設定が多い。逆に言えばこのような時間帯は主婦は参加しにくい。その点では今回のサイエンスカフェは普段サイエンスカフェに参加しないような人を巻き込むことができたと言えるだろう。サイエン

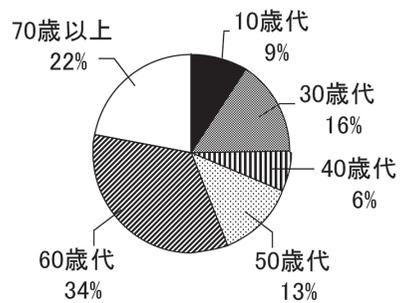


図4 参加者の年齢

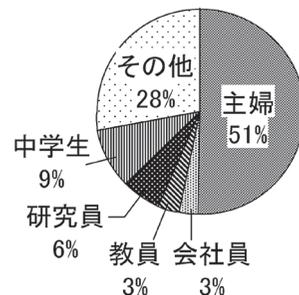


図5 参加者の職業

スカフェに初めて参加した人が32人中31人であったことから、それが伺える。一般公開には毎年来ていたという人は多かったため、参加しやすい一般公開に対してサイエンスカフェはまだまだ敷居が高いのではないだろうか。

花き研サイエンスカフェをどこで知ったかという問いに対しては、「当日、会場で」が88%を占めた(図6)。これは事前の宣伝効果がなかったことを示すが、通りがかりの人を巻き込めたと捉えることもできる。花き研のホームページで知った人は1人だけ、ツイッターは0人であり、インターネットを通じて知った人はほとんどいないということがわかった。宣伝方法には工夫の余地がありそうだ。

アンケートの自由回答欄では、「普段知らないことを聞いて良かった」「とても楽しかったです。いろいろなことが聞いてよかったです」「気軽に話せて良かった」「いろいろとお話していただき、ありがとうございます。今後また機会があったら参加したいと思います」「これからが楽しみ」「やさしく説明していただき、大変よかったです」「参考になりました」というような意見があった。すべて肯定的な意見であり、否定的な意見はなかった。それを示すものとして、満足度が5点満点中で32人中27人(84.4%)が5点をつけており、平均4.8点と非常に高かった(図7)。その理由のひとつとして、「テーブルトーク型」という形式をとることで少人数での対話ができただけではないかと考えられる。「講演会型」では質疑応答の時間があっても質問する人が限られていたり聞きたくても聞けない人がいたりすることがある。それを解消する方法として事前に紙に質問を書いてもらってボードに貼るなどの工夫をしているサイエンスカフェもある。研究者と参加者の比が1対2、3の少人数の場合、参加者が主体となって話すことも可能で、満足できる程の十分な質問ができたという点、疑問に直接自分だけに答えてくれているという感覚、すなわち深いコミュニケーションが高い満足度に繋がっているのではないかと推測される。医療現場では医師とのコミュニケーションがとれていると患者の満足度が高いようであるが、それと同様の現象かもしれない。また、「花」という生活に馴染み深い身近なテーマで親しみやすかったことも満足度が高い原因のひとつと考えられる。実際参加者には家庭で花を育てている人も多かった。一般の人にサイエンスを伝える場合、普段の生活との関わりを示すと身近に感じられ満足度も高くなるのであろう。以上のことから、双方向コミュニケーションがとれた上に参加者が楽しめたサイエンスカフェを開催できたのではないかと考えられる。

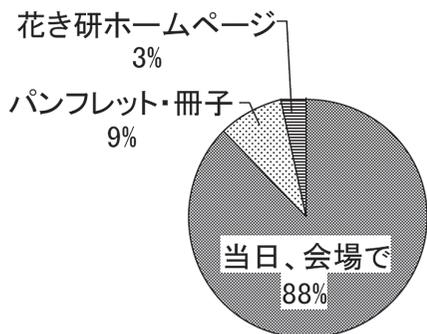


図6 花き研サイエンスカフェをどこで知ったか

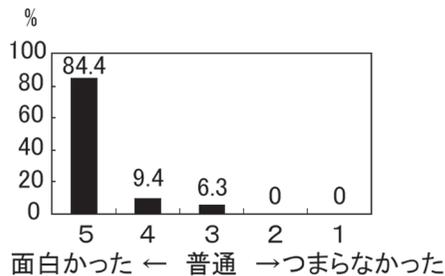


図7 満足度

## 5.2 運営メンバーの感想

花き研サイエンスカフェ終了後、運営メンバーにも簡単なアンケートとインタビューを実施した。まずサイエンスカフェをやってみての感想は以下のようなものであった。

「所外の方との交流を持つことが出来てよかった」

「サイエンスを通して、年齢、性別の異なる人同士が話す良い機会だと感じた」

「正直、思った以上に来てくれる人が多かったのに、驚きました。また、研究に興味のある中学生を見て、これからの研究者育成には大学入学前の“金の卵”の育成が重要であると思いました」

「どんな感じにも合わせられることが大切だなと思いました」

「サイエンスカフェというものを体験したことがなかったので、今回はお手伝いしか出来ませんでしたが、いろんな人と話す機会がもてて楽しかったです。次回があれば、またやりたいです」

「サイエンスに興味がある人も無い人も参加していただいていたみたいで、興味がある人に説明するのはもちろん楽しいのですが、そんなに興味が無い人にも研究の面白さを伝えるのが意外と楽しかったです。将来、研究機関で働くにしろ、教育機関で働くにしろ、これくらいのコミュニケーションスキルは必須だなと感じました」

これらの感想の共通点として、「研究者以外の人と話すことの重要性に気付いた」ということが言えるのではないだろうか。サイエンスカフェは参加者にサイエンスの魅力を伝えるだけでなく、研究者側にとってはサイエンスを伝える楽しさ、難しさを直に感じることでできる絶好の機会である。それを感じ取ってもらえたのが表れたコメントであったと思う。若手研究者は講演会などで一般の人に向けた話をする機会はあまりない。若いうちからこういった経験をし、サイエンスコミュニケーションを普段から意識することで、研究に取り組む姿勢も変わるのではないだろうか。今回の運営メンバーにとって花き研サイエンスカフェが今後のサイエンスコミュニケーション活動のきっかけとなれば幸いである。

良かった点、悪かった点を尋ねたところ、まず良かった点は、「花き研の研究について話すことができたところ」「スタッフが良かったため、臨機応変に対応できたのが良かった」「形式に関しては、今回のような出入り自由な形で良かった」という意見があった。悪かった点は、お客さんがたくさん来てくれたこともあり、会場が狭かったと指摘する意見が多かった。もう少し広い場所の方が良かったかもしれない。また、「興味がある人はもう少し居座れるような雰囲気があると良かったかもしれないです。テーブルと人員をもう少し増やして、気軽に無駄話とかができると良いかもしれません」という具体的な提案もあった。「『サイエンスカフェ』と銘打つほど、科学的な話題が出来たか少し心配」「研究内容を紹介するには気軽すぎ」という人もいた。今後のひとつの課題ではあるが、一方で多様な形式のサイエンスカフェがあってもいいのではないかとも思う。またこれは良かった点でもあるが、「サイエンスカフェというのをほとんど理解しないでお茶を飲みだけに来ていた方が結構いたような気がします」という意見があった。実際、「サイエンスカフェって何?」という人が多く、「サイエンスカフェ」という言葉はまだまだ普及していないことを実感した。「サイエンス」と付くと近寄りやすい、という人もいたため、例えば花き研なら「フラワーカフェ」のような名前にするなど、より壁を感じない親しみやすい名称にすることも必要かもしれない。他のサイエンスカフェのゲストを務めたこともある研究者からは、「講演会型」だとスライドなど準備が大変だが、「テーブルトーク型」だと特に準備を必要とせずよかったとの声もあった。話をする研究者側も「気軽に」ということは重要なかもしれない。

以上のアンケート結果より、参加者だけでなく運営メンバーも満足するサイエンスカフェを開催できたと推測される。研究者側も楽しんで話をしたという点は非常に重要である。話し手の気持ちは聞き手に伝わるものなので、双方が楽しむことによってよいコミュニケーションが生み出せたのであろう。

## 6. まとめ

今回、初めてサイエンスカフェを企画・運営してみて感じたことは、率直に、やってみてよかった、ということである。始める前は不安だったが、協力してくれる仲間を支えられ、周囲から応援をいただき、最終的には楽しく開催することができた。

テーブルトーク型、出入り自由、5分だけでもという形式も、一般公開に適したもので非常に良かったと考えられる。このような形式は、一般公開だけでなく、例えばサイエンスアゴラのような科学イベントにも適しているのではないかと思う。私自身何度かサイエンスカフェに参加したことはあるが、講演会型のようなものが多く、本当にコミュニケーションがとれているのか疑問であった。もっと気軽に、もっと相互のコミュニケーションがとれるような形式、本当にカフェで友達と会話するような雰囲気ができればいいと考えていたので、今回の花き研サイエンスカフェはその理想に近いものができたと思う。会場の問題や、テーブルごとの参加者の人数の調整など、問題点・改善点はあるが、参加者や運営メンバーに加えて研究所の他の職員の評価も良かったので、ひとまずは成功を収めたと思う。参加者のほとんどがサイエンスカフェ初体験だったという点は、サイエンスカフェという相互コミュニケーションを取れる場があるということを知ってもらえただけでも意義がある。これを機に他のサイエンスカフェにも参加してもらえれば幸いである。花き研サイエンスカフェでは、研究成果の公開、科学への関心の喚起という一般公開の目的を果たすことはもちろん、研究者と直接コミュニケーションを気軽に行うことができた点で、地域住民の安心感の醸成に大きく貢献することができたのではないだろうか。

サイエンスカフェはまだ歴史が浅く、決まった形式というものはまだ存在していない状態であり、いろんなことを挑戦していける時期だと思う。研究者と一般の人がより多くの双方向コミュニケーションをとれ、気軽にサイエンスを語り、サイエンスが楽しいと思えるようなサイエンスカフェが今後増えていくことを期待する。

## 謝辞

花き研サイエンスカフェを開催するにあたり、企画・運営にご協力いただいた農研機構花き研究所の森田裕将さん、樋口洋平さん、山溝千尋さん、渋谷健市さん、望月寛子さん、小田篤さんに深く感謝いたします。そのほか一般公開運営委員の方々をはじめ、多くの人々のご協力とご理解で花き研サイエンスカフェを開催することができました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

## 注

- 1) 科学技術週間とは、「科学技術について広く一般の方々に理解と関心を深めてもらうための週間」であり、日本の科学技術の振興を図ることを目的として1950年2月に制定されたものである。4月18日の「発明の日」を含む月曜から日曜までの一週間が科学技術週間であり、第51回目を迎えた2010年は4月12日（月）から18日（日）であった。 <http://stw.mext.go.jp/>
- 2) [http://www.affrc.go.jp/ja/news\\_event/event/openhouse/](http://www.affrc.go.jp/ja/news_event/event/openhouse/)
- 3) <http://www.suntorybluerose.com/>
- 4) 北海道大学CoSTEPが主催している「サイエンス・カフェ札幌」のように、オープンスペースで行っているサイエンスカフェもある。